キリストの福音と仏陀の慈悲

仏教では「愛」という言葉は、殆ど使わないようです。「慈しみ」または「慈悲」という表現をします。『法句経』には、こう書かれています。「愛より憂いが生じ、愛より恐れが生ず。愛を離れたる人に憂いなし、なんぞ恐れあらんや」…　この「愛」は、お金や名声など執着心や虚栄心、見返りを求める意味を持ちます。仏教では、「愛を離れること」が理想とされています。そして慈悲とは、「他の人の不幸を抜き去り、それに替えて幸福を与えること」だそうです。しかし、もとから仏教の教えに「慈悲」があったわけではありません。出家主義の小乗仏教では、個が主で、人々との関わりは重視されません。しかし大乗仏教においては、厳しい修行をしなくとも、すべての人を"慈しんでおられる仏"の功徳（恵み）によって、私たちは救われる、と考えられ、ここに「慈悲」が登場しました。

ギリシア語には「愛」を表現する言葉が基本的には４つあり、エロース（性愛）、フィリア（隣人愛）、ストルゲー（家族愛）、アガペー（真の愛）です。一方、キリスト教の「愛」はギリシャ語の「愛」とは意味合いが異なります。「エロース」は情動的な愛ですが、ギリシャ語では「受苦」という面があります。人が恋に落ちるとき、自分で制御できない感情として愛が起こります。エロースの「愛」は、荒々しくも純粋の感情です。ギリシャ神話では神として扱われ、その矢で撃たれた者は、愛の苦しみ･虜になります。エロースは精神の愛も含み、他者への思い・情熱です。キリスト教では、「世俗的・肉体的な愛」…理性なき情欲とされます。

「フィリア」は、通常「友愛」という訳語が与えられます。これは、友人や同胞などに対し感じる愛という意味です。フィリアの愛には、本来は連続的な広がりがあったようです。キリスト教では自分の好みに合った者や共通な場を持つ人に対する愛となりまし

た。したがい、差別的あるいは閉鎖的な愛と解釈できそうです。

アガペーは、真の愛とされます。キリスト教では、生まれながらの人間にはなく聖霊による超自然的な賜物であり、信仰と祈りによって与えられる神の愛を指します。つまり、エロースは本能的な愛、フィリアは見返りを求める愛、アガペーは無償の愛です。

こうしてみると「愛」は果てしなく広く深く、解釈もまた様々ですが、仏教とキリスト教の愛は、本質的には相通じるところがあります。「慈悲」と「アガペー」が真の愛（仏の愛、神の愛）で、『法句経』にみる愛やキリスト教の「エロス」や「フィリア」が、人間の身勝手な愛です。尽した分相手もそれに応えるべき「見返りを求める愛」「見返りで自分を満たす愛」と言えそうです。期待しすぎると、性急になったり不満を抱いたり一方的になりがちです。かといって無償の愛とすれば、「成果や成否は問わない」ことになります。子どもに対する親の期待は身勝手になりがちです。その一方で、子どものために食事を作るなど身の回り世話をします。これは概ね見返りを求めないものです。親の愛情は二面性を持つように思えます。

また、人間は自身を頂点におき、都合の悪いゴキブリやハエは駆除する一方で、ペットは可愛がります。草花も大事に育てられるのものあれば、雑草と不名誉な呼ばれ方をされ排除されるものもあります。人づきあいもまた同様で、相性や遠近があります。自分に都合のよいものを大事にして、都合のよくないものは排除する…これは人の本能あるいは性（さが）でもあります。人間の愛には、見返りの愛や無償の愛、差別愛が混在しているようです。一方、キリストは、出会った罪人や病人、差別されている人々に神の愛で施し、傷を癒します。それは、仏教での愛と慈悲の違いと同様に人の愛と神の愛の構図を描いているようです。